

13
3416
10



冷汗を流すの今又よりの野原を且々頭を擡ゆりある越度よりて
 おの命を乞ふるの脱るべうとゆつて件の犬のふ就よる長ころうと追
 へるふゆつて然とて如此と陳とく免さるへるふあは後大慈悲
 仰ぐの願ふ令政提擲く吾侪むりへ救ひ多助け多とゆ声も枯野の
 虫の鳴音よ心細け口説たり龜篠やま嘆息一人の頭とゆめなる
 よふころ憂れめはほ好も互れも公の道りくまはる卻は憎むる人の私
 めく人を恵め職小欽職を立と邪怪小使り緯下まぢふさほるふ
 そまふささるる番代親子を生特と捕捕鎌倉へ牽へるとも可愛や
 親の偏憐むと言一言もゆけさせぬ信乃の現在ころふが任る王憎と
 番代は葛延む身るのそ一朝夕罪あり快愉とまるとは入るめこそふ
 あふいと痛く悲しく怒る夫の袂小携り王法を勸解くけ一日の追捕

の沙汰をとめころとむらうとめくその罪咎賢む脱とじつと故入方
 うまと人あふぬ骨を苦しめいと浅らるる女子の智恵及ぬぬかむ
 念く僅小便りぬる番代が秘藏せる村雨といふ一刀の持氏朝臣のち佩刀
 めて春王君(讓せむ)源家数代の重宝るる管領家もよく知食はま不
 思召よ豫くそのゆえあや今彼宝刀を鎌倉へ献す件の罪科を勸解さる
 そこのうへは恙なく番代親子も赦さるる人そとぬまが我を折て墓六のめ
 む身まひ維り又この願ふに鎌倉へ上べたかゆらぐとふか城をるほ
 憐心又疑ひと自滅をさるせんまはるそのとも先期をりし
 告んとくかくの竊は根えいと真一す小説示せし糠助魂とふか
 太丸息を吻れ言けりけりゆひぬ飲食の他人集り憂苦る親族取入世
 常言はとあるる年才大庇を措せると婿をさるる竹人うたの危

穴眼を人君をせぬの才を以て棟助かくて之の古の根の末人限り富妻那と
かえり辨をりて犬塚ののちろ瓜和げ縛よくとその又ひひるんそのと死す人第
一番小僕を赦させ多善の言げといふとあまもや退ると立あがるとへ電條
要時と引とめ。いふおづみあふ松ども成ゆるなゆけ一日そや。長食残よ
時辰程と夜あけて後悔多あるといへ頻うち点頭其外へ勿論女才は
そろ多とゆと心も吏を隔亮を逆ひぬとさく遠く引用人して推外。倒さ
かるるんくさむと外へ身を横りて出へる電條吐嗟と刃を起し
倒へ隔亮を受とめ。さても鹿忽の人々もと唾たるあう立著は六次の間又
竊用せる。墓六の板戸を開たると夫婦目と目を注し。莞尔と笑て電條欵
ころ使へとよくゆめあや。あふあて首尾よ。といふ声み目や先へけん臺子
のあふふ茶袋挽くけ。睡臥と心額着が又挽くけ。白の音小敷馬さるあ。

夫婦ハタ之雨の雷。旅人のそぐ心地。密語あむる共納戸のこ隠れ
多まら。宿小棟助へ踏む足更地つらむ。慌忙きそがまふ犬塚が宿所赴き
件の縛のちめより。電條がひつらる。瓜あちをるくあふ告童の智慧小誘引
そとく短くも支派惹出せ。僕瓜太人氣ほとく。叱りあふ。勸解もせぬ。只勸解
とまるとく。免ささるる。瓜の御教書の破損する。さつは彼鄙語と地獄も
ある人あはと。いふ。定よこのりもく。腹きさほとのとどひ。ちんがが奴前
の菩薩心怪可愛いと心不滅が。則親之聚憂苦もく。吾侪もよる日ふあは
る。我つよたも事あむよ。宝の身のさ。替り。村長よ。瓜卑。こまとく。
聊も恥よあふ。奴は降る。長順え。ちんが子とく。よま。ほ。何復も子を
見ふ。アとく。この一幾も。折る。けり。引と。と。瓜合。辨を盡く。勸と。番
作。騒ぐ。気色。う。つ。と。安果。御教書の。実る。敬馬。き。ゆ。由。理。で。え。

和殿その一通矢認てかゝりつゝやと向きとく糠助討死檢死するお人あり
 老るに如く吾侪の固よりを筆する所教書とすを伴つるがといへ番地冷
 笑ひとよとよ人の心さあぐりて測りて死のぞく笑の中刃を隠す
 今戦國の習俗に親族えとて心放さず臍を噬の悔あまらるる年來の難言
 のおのひをまつ所斬夫が猛り勇をいと惜む怪を愛するはさうなるこ
 又その事実ありと村雨の刀を出し罪人贖人と謀るとも赦さざる益の
 所約し大刀ぶ出さるる悪る一と行人が定めしむる管領家の沙汰ありむ
 下よと上を討るんかおんがそれの憑るはしり果しと謀る如くゆらるるゆ
 あふ鎌倉へ牽きと後又大刀を進むるとも遅れ又あふと和殿のうへ
 つつと心づいてと女とく子ゆふ小駱骨とく不覺ととふ武士の
 瑕疵るりその後より後ひととといつとく糠助膝もち敲死するとを

偏僻あり疑うけぬ過さば後悔其おまきじ親子といへば三人が命口
 一口の大刀を出しと救つてめりるる半响ととも速れがより糠助の恥事
 子を泣け此人は指爪さき辛くと助て不可惜武士の疵が著るひとてけ
 一と應といひ一声をばせと宿所へ還るべき當合とく拜むらんえとを
 とうた口説緯果げうとあふささる番地やとてあまら子一人がうらるる
 八割みせととも人の異見を何てみまきづたかても曉らぬ和殿が周章只今
 笑えとよ由らるる考と返答せん日とて再び来るといふ糠助外をん
 之の背門の柳の緯目が落且今も暮るる宿もほ夜食過ると又来るとい
 織る人へ人を謀るるををぬるるぬるるあまら人を疑ふ糠助と入る
 殺しめると且退ると片膝を立てて中や刃を起し足の痠痺を捺あへ膝歩
 降るる皆脱の人の草履を片足穿れ片足の穿ぬ洗走馬憂の重荷とて凍解よ

掠畧人のく。いと浅き。ある所行る。抑この二十年年来渠さあへく。
 紅灰盡く。村雨のちん佩刀を奪ひとると。殺遍といふ。
 人をかく。利は誘ひ。價買く。彼一刀を買んといひせ。或は更蘭人定て。
 牆外踰鎖。盗ひ。とせ。夜も。渠百討を施せ。又百乃
 備あり。この故ふ。その悪念。今ふ至る。果さふ。いと朽きく。
 念はふ。けふ。渠が犬又傷けて。その鬱骨を遣さぬ。
 復起。聖御教書破却。假托く。宝刀を。奸計。鏡は。照る。
 抑年来。甚六が望を。宝刀は。被る。と。その。
 跡と稱く。莊官。相傳の家譜。舊録。は。
 刀を。家督を。及人。と。成氏。朝臣。没落。の。
 既。謙倉。の。處。方。家臣。の。

まく。舊功。舊恩。ある。新。微忠。を。頭。さ。
 渠が。二。村雨。の。一。刀。を。謙倉。へ。進上。公。私。の。鬼胎。を。
 心。安。く。せん。既。又。婿。の。為。その。莊園。を。争。
 惜。ん。あ。の。件。の。宝。刀。へ。幼。君。の。ちん。像。見。亡。父。の。送。命。重。
 共。小。滅。も。奴。夫。の。贈。又。その。初。村。雨。成。氏。朝。臣。へ。進。
 春。王。安。王。兩。公。建。の。傳。り。この。兩。公。建。の。宝。刀。を。君。父。の。像。見。と。
 ちん。菩。提。を。吊。を。親。の。遺。訓。を。兼。る。の。永。壽。王。へ。進。
 る。の。た。と。よ。これ。の。後。は。仗。の。う。は。人。と。る。の。ち。小。件。乃。宝。刀。を
 智。殿。成。氏。の。身。を。と。思。ひ。み。年。あ。の。賊。を。御。
 秘。お。今。宵。は。又。讓。び。ん。や。と。る。を。硯。管。の。刀。子。を。撈。

番代遠訓
えきいえ
えきいえ
子内村兩乃
太刀を授



志の



帶雨
南离楚
知春北
入燕

犬塚番作



侍り免大刀さやんお月代まふ
雲きれく移む雨乃そ玄同

つゝ大竹の筒を目うけく丁と打ハ釣索弗と打断く筒ハこまろ磯と落兩段ハ
割とくあつちと生るハ是村兩の宝刀ハ番他ハ遠く錦の囊の切解けて来く
額ハ推あて雲時念ハ抜放せ信乃ハ同近く居る月りく鐔根より刀大おて
瞬由せむち熟視る煌々る七星の文照耀く二尺の水寒し露結び霜凝く
半輪の月くと疑ハ邪を退け杖を治めく千載の宝と稱く唐山の太阿龍泉我
邦の抜九蒔鳩小鳥鬼丸るどりかとも是ハハおぼしとんえくまらる且く
番他ハ刃を中をう鞭ハ納め信乃この宝刀の奇特をあらや殺氣込含く抜
放せ刀尖おと露雷ア雙言を欲刀ハ衅とくその水まきく漬まで巻ハ隨ハ
散落く壁ハ彼村兩の樹杪風の拂ハか如しおまら村兩と名つけし内これを
汝小とせんよそのさめめてハ相応くま鬢を短く今よまらと大塚信乃
成考と名告まじかひとハ二ハの春をまらとをまらとせんとまらと

この宿病ハ苦めらとちかかく存命くまらとけり死まら翌死人よりヤ
雲時ハ死るまらと今茲の寒暑ハ心りと只恨む汝僅ハ十一歳孤と
まらとと孤といひけり又嘆息を親の顔みち瞻まらと行る汝言ハまら
縦ヨヌ病ハおまらととおん年五十ハ満まらとまらとまらとハ死ハ命ハまら
羽まらととくまらとぬ祥を急せまらと御教書の支実まらと搦捕まらとと
おん力捕兵を引けり吾侪を救ハまらとのおん底意ハまらとや勿体まらとと
いハせと果む呵まらととち笑ハ御教書の事詐欺まらと搦捕まらと外ハは然
らまらととが妖の詐欺まらとのおん糠助ハ汝が事を懇切まらといハまらとと辛
たハ死期遠まらとぬ親が瘦腹今面ハまらとと切まらと汝を婿ハ杜んまらといハまら
いハく呆まらと果おん言葉ともまらとぬぬのまらと身親まらととも彼人ハ大まらととまらとぬ冤家
まらと故まらとおん力を啜まらとと冤家ハその子を寄まらとまらとまらとと結ハ

父へちち点改その疑ひの理をまことぞ則こが遠謀村兩の大刀由奪れど今も
 好の借りて汝を人と成さん。そとかくても存命を親が自殺ハ子と
 肥き苦肉の一討つりとまごや。こが好夫婦ハ利み耽り恩義をまごね性
 とも今番他が自殺成さる里入りよ長久憎ま。集合その非を訴ふ
 ところやあんと咎む。まごんま真実中汝を家養とて実意を示して
 里人ホが憤解る。又この宝刀ハ好夫婦がいつらま小賺まこと素より親の
 送命あり人と成る後許我へ系ま。替殿よ丁を献らめこのまの美引はと
 固く阻ま。常住坐臥よその盗難を禦げし宝刀全く墓六がひみ入るみまを
 とくとも亦その家よあるとんハ奪る易しと心放し。緯急まハ逼るべま。ず
 こま防ぐハ汝が智みあり。懸み宝刀を隠さる奪人とま心弛ま防ぐとハ九
 竟み畧ま。便長黄叔度が琴を鼓し群賊を退けしとりの謀みおは。暮

兵成る不堪ま。よく敵疑せ危けとど選り安く九死を出一生とんま。
 寔み大智の徳るま。機み臨ま。変み應み。防ま。御ま。念ま。れ。死。た。つ
 へま。又。こ。が。好。夫。婦。漸。ま。志。改。め。實。み。汝。を。憐。ま。汝。由。亦。滅。心。り。て。仕。て。養
 育の恩義を報へよ。又その害心已む。て遂に禦み。御る。ハ。宝。刀。を。抱。ち。て。速。く
 去。ま。五。年。七。年。養。ま。と。汝。ハ。大。塚。氏。の。嫡。孫。ま。墓。六。が。職。禄。ハ。汝。が。祖。父。乃
 賜。め。る。ま。その。禄。ハ。人。と。る。ま。伯。母。夫。の。恩。み。あ。ま。と。報。報。ま。去。れ。ば
 とも。こ。ま。不。義。と。ん。ま。こ。ま。の。理。義。由。あり。べ。し。殘。り。牙。わ。の。び。長。く。由
 あ。ぬ。餘。命。を。食。り。こ。の。期。を。過。ま。後。竟。み。病。の。床。よ。息。絶。る。ま。伯。母。汝。を。養
 つ。ま。宝。刀。由。入。の。み。落。る。謀。り。画。餅。と。る。ま。こ。の。お。ん。佩。刀。ハ。君。父。の。像
 見。首。陽。み。蔽。を。抹。む。と。く。ま。二。君。み。仕。ぬ。番。他。が。寢。期。よ。こ。ま。借。を。ま。
 奇特。ハ。と。せ。ん。と。村。兩。の。宝。刀。を。再。び。と。ま。あげ。ま。抜。放。ま。と。ま。信。乃。ハ。睜。く

卷の推乃王後くあぐ謀せざる豫く先期のおん自害ハ飽まぐ吾侪を思召さぬ
 慈をこころたやあふぐ禁めなほあゆむとよや難治の病著るりたおのが公の
 及ん程良某良医ぬふん竭させく者と冊たな王遂に届ぬぬるるぐち
 驚れくもゆえ一こま正しく又定めらるるのときふ腹切るる人只狂死と
 ありま今宵み限るころといらせも果む声を激し虚けたらぬあめら
 死さべん時み死さば死さるふもあぬ恥多うと嘉吉のむう一結城まぐ死
 さす一君父の為寒とるに下り死麻の二年の僑居母の今果ふあふり
 へは甲斐なる恨らるる。そま下りてまう九年あまう。ちまうのあまう
 食の民とるるる露命食食王今又子孫のうん思ひく。あまう存命べん
 千曳の石ハ轉まるところが心の轉まると禁る不孝今あまう棟助が
 とあふ妨せん其知退むやと敦圍く左手を伸く揉みせが警御離し髪又

奉目く轉輾つ推乃右の巻紙些も放さぬ。あん叱りあまう。こののの
 ねころ小侍して林めゆりしゆりさせまんと流著刃をどろんと喘逼まも小
 腕ふ及ぬ必死の勢ひ放せくと怒の高声子へるは寅縁の一生懸命果る子
 ちハ番作のこ子を楚と推伏く背み尻をうちかへ病衰ても勇士の働ま
 こハ何とせん哀やと信乃の胸てり通う及又さんとつととも恩義の厭上は愛
 著の柳由鉄輪由推居らると又せんまへるるまけり。その隙み番作ハ襟くき
 となく袷衣推祖れく刃を引抜る右の袂紙巻をそとく氷るを刃尖を
 腹へくさ突きく。あまう静み引遠せむと漬る鮮血の下ふ布るその子ハ
 ちの涙親ハ刃をとり直し。あまう弱る右のふ左の巻のちをそとく吭のあまう
 血の涙親ハ刃をとり直し。あまう弱る右のふ左の巻のちをそとく吭のあまう
 刺んとく突外一つあまう咽喉を劈き俯ふし親と身を起すと信乃も
 半身韓紅。あまう父の亡骸を抱著つくと泣その形勢も秋寒を風よ

阿与四郎ハあつて死にけり。彼犬を獲てこまされ彼犬おろふ父喪ふその
 ころあつて又憎むべし然ともこの畜生を捨おらん不便
 死を促さよかゝる宝刀を穢るべしともぞれどぞるまじし鮮血に染るる刀
 の奇持亦是維かゝる惜みしや苦痛を助けてゆさせんやゆめと問うけく
 大刀を引提て縁頼より閃刀と下りてあつて揚る刀おれそとぞ與四郎ハ
 前足と突立て項を伸りとて切せしめぬむろの健氣さふ大刀振あげ
 拳をもよゝらる。この年申す。年未親の養とて多し馴れし押著し
 現身のいぬぞべしと破るべしとひあつて躊躇しがさるもこの物ぞり
 需要時ハかゝるとも羽を振るる息絶えし又伯母夫のいぬ死んぬと
 如是畜生慈悲菩提心と念ふ。閃刀の下の犬の頭ハ撲地と落さすと破る

鮮血の勢ハ五尺の紅絹を掛らる。激然とてその声おる。後尊然とて立
 沖の中ハ晁く物とありと左心を伸きて受留む。鮮血の勢ハ長く腰に
 再び漬る。信乃ハ雷る刃の水氣を袖に拭き遠く遠く聳とゆめと腰に
 帯。彼割口より出る物ハ濃血拍除く。つらつらふ長る一顆の白玉
 その大き豆小倍。細融の孔さあり。緒締るどいふ力のあつて必す
 記總あり。思ひける物あり。あつて深く研り。いと明くをける
 月の光アふ。翳つ復つ。玉の中ハ一丁の文字あり。方是孝の字。こ
 現刀と鑄らる。又漆のく書る。造化自然の工ハ似て
 小膝拍と感嘆。呼奇る。この白玉妙なる。この文字。こは
 ちとどとらど。情も合はさ。母一子を祈る。瀧の川よ。わがこ
 途ハこの犬を。愛する。又家路ハ。又家路ハ。又家路ハ。



八犬傳二冊巻五

十四

山崎堂藏

小次郎
 自殺を決
 むのう
 て信乃與四
 郎を破る



八犬傳二冊巻五

山崎堂藏

現小神女を目撃す。一顆の玉を授けり。行心く受外。玉の犬のほとり小輪が尻
とんとく。素多の玉遂又あると云。この比よりと有身多ひと。次の年秋
のちめ小吾侖を奉多ひ。と母の告せ多ふ。そのち家母の長た
病著佛小神は祝ひ。驗多る。と云。その玉の失る故。年々病。遂に危窮小
玉をせ多め。秋のち。素多の玉を再び獲多る。母の病著。順快多る。のちやと
玉を成す。小被ととも。人もせと。と云。と云。玉の求めく。出づ。と云。と云。
家母への冬。力多る。と云。これより二年のこの秋。今宵家尊の自殺。又
吾侖は又冥土の侶と云。ふ。け。創め。犬の瘡口より。不思議小出る。玉匣
二親多る。豊ひ。と云。と云。光期の今果。及び。と云。名を表る。孝の一字。信乃が
皮考。定ふ。と云。玉あり。と云。六日の昔。蒲十日の菊。何。と云。と云。腹
と云。度へ。幾石と投棄。と云。玉の。と云。反。と云。懐へ。と云。怪。と云。

と云。と云。撥。と云。又擲。と云。飛。と云。と云。と云。及。と云。果。と云。又。と云。時。按。と云。と云。点。と云。此の玉。冥。と云。火。ある。の。牧。家。母。が。病。ひ。と云。と云。犬。が
吞。と云。と云。十二。年。の。今。果。至。と云。歯。牙。堅。固。の。毛。の。光。澤。枯。せ。と云。と云。血。氣。と云。
衰。と云。と云。腹。小。の。玉。あり。と云。と云。是。二。つ。る。世。の。重。宝。あり。と云。と云。
と云。と云。後。階。度。趙。壁。と云。と云。と云。命。と云。と云。惜。と云。と云。ぬ。小。宝。と云。と云。と云。死。を。止。ま。
ら。と云。と云。貴。人。の。亡。骸。の。珠。を。含。り。存。る。例。の。あり。と云。と云。是。由。又。宝。を。瘞。と云。と云。益。の。所。為。と云。
宝。刀。も。玉。あり。と云。と云。後。人。と云。と云。取。と云。と云。と云。大人。小。追。つ。れ。存。ら。ん。時。程。と云。と云。
と云。と云。昔。の。丸。と云。と云。父。の。死。骸。小。推。並。び。既。は。最。期。の。坐。を。占。て。宝。刀。を
と云。と云。と云。戴。き。や。と云。と云。緒。膚。を。推。祖。つ。と云。と云。と云。左。の。腕。小。大。丸。あり。と云。と云。瘡。ひ。と云。
と云。と云。形。状。牡丹。の。花。小。似。と云。と云。と云。付。磨。り。と云。と云。と云。腕。を。曲。と云。と云。と云。推。拭。と云。
と云。と云。墨。と云。と云。の。苟。は。塗。り。と云。と云。と云。と云。黒。丸。瘡。あり。と云。と云。と云。腕。を。と云。

搞死きふあてもけふあても。こは小この瘧あるとほ。嚮う玉が死かへん。
 懐ふ入りしと左の腕へ礫と中まて。些痛をおけえし。そは病瘧著べうを
 妖怪をこるとありと親のをえも。僕藉も。豫くこんつる長うり死皆是
 妖怪をこるとありと親のをえも。僕藉も。豫くこんつる長うり死皆是
 稀世の神童。智恵由言語由古人の愧む。甘羅孔融幼悟の才今又あふ
 この子あり。自殺の覚期をいそふ。春の夜も短く。初夜生る
 寺の鐘の音の音をきき。信乃の額の乱髪。狐の揚る宝刀をひき。把り
 鳴乎。こはう。後さふけり。考妣尊灵一蓮托生。南無阿弥陀佛と唱つ
 刃を兎やと引抜く。腹瓜切らんとさる。宿ふ忽地。庭の樹蔭より。中を信乃
 等。あちあちといもせ。こはう。男男女女三人。まあ。こはう。似小縁類

よ。齊一。ま。入。あ。け。り。

第二十四回
 一雙乃玉児義を結ぶ
 三尺の童子志成演

信乃の疾ふ入。あま。呼吸禁るその声をきくと。いとも些と擬せ。てや
 刺とんと刃を奉るふ。肋縮し腕癱麻。死を速ふさる。こは
 朽を。とく。遍ふ死んく。とさる。不ふ真先。又進む。め。長則別人。さ
 嚮ゆ。ま。つる。棟助。あり。吐嗟と。さ。騒ぐ。め。う。白刃。あ。あ。そ。と。人
 後。の。く。入。立。遠。す。く。矢。庭。の。信。乃。を。抱。禁。ま。る。前。る。る。墓。六。亀。條。左。右。より
 腕を攬る。聊も動せ。且この刃を放てよ。といとも信乃の心を緩め。あ
 面。の。認。ま。し。の。名。告。め。あ。は。伯。母。君。の。夫。婦。何。と。く。来。ま。せ。と。い。ん
 是く。亀。條。酸。鼻。む。つ。よ。親。の。似。く。そ。う。も。さ。ら。い。あ。や。あ。う。ん。黄。童

制度の中及むる。大刀を山に及ぶ。命の後ひきとる。墓六眉根と
よせ。宝刀のつらさ。その人。生賢。亀條が。親族が。相譚へ。狐疑。散。居。信乃。直せ。徐ハ。鞭助を。宿野。小。斬。一。人。喚。電。條。鞭。助。番。借。亡。骸。を。斂。墓。六。宿。野。小。の。亀。條。鞭。助。信。乃。の。追。慕。せ。と。い。ふ。と。る。この。日。指。を。送。る。の。無。慮。三。百。餘。人。を。信。乃。が。る。

み。せ。め。の。面。目。人。と。人。の。墓。六。亀。條。へ。番。借。が。自。殺。を。せ。つ。る。家。小。赴。死。信。乃。が。自。殺。を。禁。め。る。縁。と。番。借。が。謀。り。違。つ。ど。御。教。書。の。支。へ。詐。欺。る。小。犬。塚。親。子。自。殺。せ。里。人。ホ。憤。り。破。き。ふる。と。の。や。せん。信。乃。を。養。つ。里。人。ホ。疑。念。も。解。べ。く。と。夫。婦。猛。小。商。量。あ。り。真。実。中。小。め。て。る。と。信。乃。ハ。其。の。性。聰。察。父。の。送。訓。又。多。ひ。あ。い。せ。く。その。詐。欺。を。猜。せ。り。へ。墓。六。亀。條。を。め。め。入。村。雨。の。大。刀。の。み。が。信。乃。が。大。刀。を。出。さ。し。つ。瓜。を。や。け。く。墓。六。の。室。刀。と。い。ひ。又。信。乃。の。心。決。て。父。の。先。見。明。智。を。感。し。舌。燭。す。顔。の。色。を。変。じ。信。乃。ハ。心。決。て。父。の。先。見。明。智。を。感。し。さ。く。自。殺。を。止。り。信。乃。ハ。小。泥。中。に。埋。ま。り。名。を。惜。み。不。事。ふ。し。志。を。得。ば。り。珠。玉。と。づ。小。泥。中。に。埋。ま。り。名。を。

口碑を送りけり。間結休題葬の中果一々龜篠ハ又墓六と商量し。信乃と召とさんとの迎の人を遣せし。信乃ハせめし亡親の中陰果て後みこそ命ふ後ひなむめ且く許させるといへ。是も亦理するれども黄童一人の置き。糠助ハその宿所いところをのれ。あはれ朝みるるよしをさとし。額義ハ年究ゆ。信乃ハあはれ勝りせむ。言葉敵するうめのるらん。然るハこの小廝ととも。薪水の勞をよく佐けよと分付て。信乃がかえぞ遣しける。さるる信乃ハ是えおつる本心を探らんとの。間監あ。とちひし。あむの心を放さむ。あつら火を打水と汲み。父母の靈牌はつえの。喪ふ龍アそむる。宿ハ早晚ハ花ちり。若葉をよと青山辺ハ杜鵑鳴く比ぬ。信乃ハ日来額義が言行ふらるをいつらふ。あつら温順ふして。村落の小廝ハ似む。まらる庄官の虎威を借て。これと侮る

氣をへる。いと老実ハ仕へ。さるる深く感佩し。是より多く疑ハむ。有一日額藏ハ信乃が垢つた汚しを。さるる人の三七日。ちや過させあひし。髪ハ結なまらむと。行水ハ引多り。湯も沸てゆ。といひ。信乃ハうち點頭現。郊月の暑ハ堪が。さるる南風ハ吹入きて。搔ぐる垢もよれる日。よくこそ。さるる浴とせんと。軀て縁頬のわたり。立て衣を脱ぎ。さるる額藏ハ大鹽ハ湯を。さるると。汲み水。試み。あつらその背後ハ。さるる。徐く垢と搔んと。信乃が腕の痣と。和君ハあつらこの痣ハ。軟吾侑も又似る。とあり。是又。あつら。推祖。背ハ示。さるる。現身柱の。右の胛の下へ。黒く。あつら。瘡。あつら。その形状。信乃が。これ。一般。その。額義ハ。袖を。禪を。掛吾侑ハ。瘡へ。さるる。胎内より。ありと。和君も

少中（あ）向（ま）信乃（の）へ只（ただ）笑（わら）て答（こた）む。額（ぬか）流（なが）へ又（また）緑（き）るを庭（にわ）のく不（ふ）指（さ）しと彼（か）処（こ）
 する梅（うめ）樹（き）のちるふ新（あらた）又（また）土（つち）を起（た）せしとち不（ふ）くく些（ち）高（たか）き処（こ）あり彼（か）ハ什（じ）
 麼（ま）何（なに）ぞと向（ま）信乃（の）答（こた）てあれを其（その）許（もと）ぬとちれしる犬（いぬ）を埋（う）れ処（こ）よと
 いふ額（ぬか）流（なが）漸（ゆる）らおめらちゆと。させる仇（あ）ゆありふちるふちる後（のち）死（し）入（い）る畜（ちく）生（せい）ふ
 傷（きず）けしるふ由（ゆ）緒（お）るこあり。吾（わ）侪（ち）も亦（また）彼（か）犬（いぬ）を打（う）ち。刺（さ）とちる人（ひと）と和（わ）
 君（きみ）又（また）ゆれしるるふ。さもあぢきやと事（こと）毎（まい）ふ心（こころ）あぢけふめいひかるとど
 信（の）乃（の）ハ是（これ）ふとちる笑（わら）の。亦（また）その是非（せいひ）をいふとほ。かくて信（の）乃（の）ハ浴（あ）果（こ）て
 まがその衣（きぬ）と揮（ひ）ひしふ忽（たち）地（ち）袂（たもと）の間（ま）より。一顆（ひと）の白玉（はくぎよ）輾（ころ）び落（お）るを額（ぬか）流（なが）
 ち中（ちゆう）ととち留（とど）めしつくとて不（ふ）審（しん）や。和（わ）君（きみ）ハこの玉（たま）獲（と）ちひし抑（おさ）抑（おさ）亦（また）
 家（か）傳（でん）の物（もの）故（こ）由（ゆ）来（らい）を安（やす）かちりけれといひつ。馳（ち）て返（か）るとめど。信（の）乃（の）ハ王（わう）を
 ちあふとちる。これ一朝（いち）小（せう）親（しん）を喪（な）ひしるの憂（うれ）ひかちるて。この玉（たま）と送（く）れ

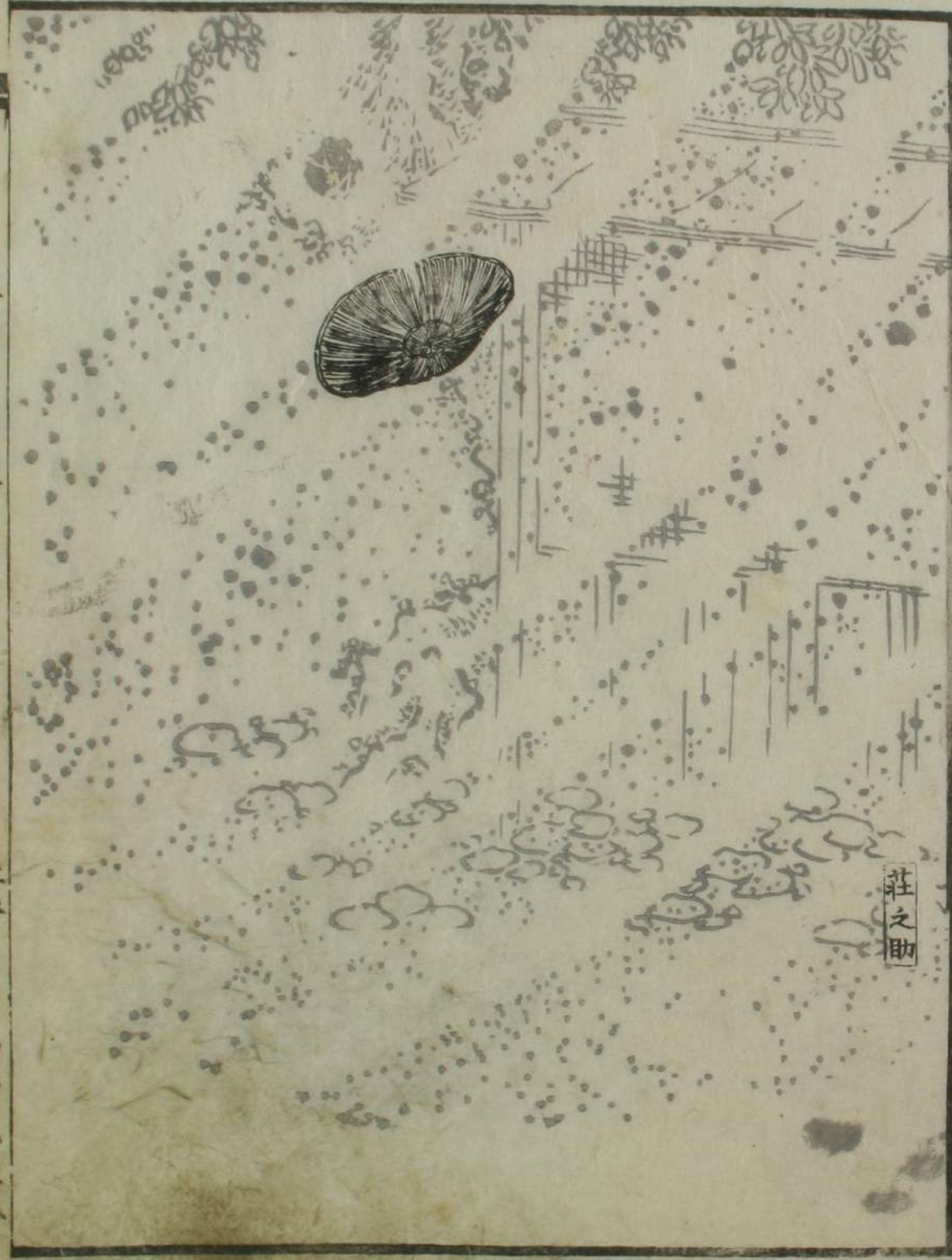
たり。さるる縁（えん）故（こ）あり。とちるり答（こた）て鮮（あ）小（せう）生（せい）口（くち）後（のち）を額（ぬか）流（なが）らるる款（くわん）むを數（かず）回（かい）
 歎（なげ）息（いき）。人（ひと）面（めん）同（どう）くちるれども。他人（た）人（じん）ゆゆの似（に）るものあり。人（ひと）公（こう）同（どう）くちる
 ども。又（また）知（し）るといふべし。和（わ）君（きみ）吾（わ）侪（ち）を疑（う）ひありや。吾（わ）聊（りょう）と蔽（か）まるとは
 是（これ）と見（み）ぬといひし。唐（たう）るる獲（と）身（しん）囊（ふくろ）より。一顆（ひと）の玉（たま）をとり出（い）せ。信（の）
 乃（の）も又（また）汗（あせ）す。これと掌（ての）小（せう）受（う）つるよ。ち玉（たま）と一（ひと）点（てん）異（い）るる。但（た）
 その文字（もじ）同（どう）くちるで。義（ぎ）の字（じ）鮮（あ）小（せう）流（なが）らる。こふ至（いた）てちるあぢ感（かん）悟（ご）し。
 恭（こう）しくその玉（たま）を額（ぬか）流（なが）み返（か）していふ。吾（わ）年（ねん）少（せう）く才（さい）足（そく）されハ眼（まなこ）あれども
 るたぐ如（ごと）く。ち中（ちゆう）足（そく）下（げ）を認（しん）らるとして。初（は）ハち疑（う）ひさ。日（ひ）ちる歴（れき）隨（ずい）その
 言（こと）と行（い）を試（し）つる。ち及（およ）ぶ所（ところ）多（おほ）く。人（ひと）ちるじとちるめり。素（そ）性（せい）を
 問（と）ふよりちて。けふまがハ黙（もく）止（し）らる。少（せう）くはけちるるも。身（み）と相（あ）似（に）する
 瘞（えい）とちつ。又（また）この玉（たま）の等（らう）しあり。必（かなら）見（み）宿（しゆく）因（いん）の致（ち）とち一朝（いち）の縁（えん）めあぢ

先^ヤコ^マ玉^の由^来と^鏡べ^し。この玉^ハ筒^様。如此^ノの事^{アリ}。と神^女影^ノ
 向^ノのち^めめ^{より}。與^四郎^犬が死^とを^促して^さら^んど^もその^會口^{より}。玉^を獲^らる^る
 終^つて^も。猛^ニ疾^のの^りと^来。一^度父^が先^見送^訓の^趣此^由蔽^さと^鏡示^せる^る
 額^藏へ^耳を^側て^坐ふ^膝の^進む^を覺^えど^且感^じ。且^嘆じて^落涙^を禁^め
 あ^へど^且て^貌を^改め^世ふ^薄命^{する}の^こと^のさ^らぬ^和君^が人^を
 笑^けべ^又後^のも^心地^せる^{。抑}吾^儕ハ^伊豆^國北^條の^莊官^に區^犬川[。]
 衛^二則^任が^一子^ハ乳^名莊^之助^と呼^ぶ。且^一の^嘗吾^儕が^はま^まと^死ふ[。]
 家^の老^僕ま^りけ^るの^の。その^胞衣^と埋^んと^く國^の下^を掘^ける^ふち^り
 る^くの^玉を^獲ら^る。且^未曾^有の^祥瑞^る人^と入^らる^ふめ^と。こ^が
 背^ハあ^やげ^る。悲^ある^をて^父ハ^る不^公り^とる^くひ^けん[。]その^吉凶^を
 問^人と^さら^ふ伊^豆ま^ささ^る博^士は^但郷^の黃^檜寺^ハ岡^帝の^廟あ^ら。

父^年來^信じ^ふけ^れハ^あら^ず。為^久後^の命^運を^問な^り。念^じて^神
 籤^を拾^らる^ふ第^九十八^籤を^獲ら^る。その^詞ハ
 經^營百^事費^精神[。]南^北奔^馳運^未新[。]
 玉^兔交^時當^得意[。]恰^如枯^木再^逢春[。]
 とあり。父^聊文字^{あり}。詞^のら^うと^判さ^るふ[。]起^句の^文吉^るど^只その[。]
 結^句ハ^頼あり。玉^兔ハ^月の^異名^{あり}。交^らる^は滿^月なり。十五^夜を^いひ
 る^べ。かれバ^子十二^三才^まど^多病^るど^めや^あら^んど^んあ^られ^ども^年
 十五^{より}。因^陽奉^復して^如意^延命^の祥^るん^と。莊^之助^と名^けし[。]と
 母^の物^々ら^ふつ^莊ハ^莊盛^るる^のら^うる^べ。さ^ら後^ハ鎌^倉君^の武^將
 成^氏朝^臣京^都將^軍と^あん^中よ^りど^西管^領小^攻ら^れて^并我^へつ^不お^せ
 の^こえ^る。寛^正二^年小^京都^{より}。前^將軍^普廣^院の^第四^男政

知とあしせしむ。右兵衛督小拜任せられて。伊豆の北條へ下させらる。堀
 越の御所と唱て。諸國の賞罰を告げせしむ。政知朝臣武威。威を慕て。民と
 憐ひのろろ薄く。驕奢と極めぬ。程ふ不時の裸役。いと長き。つが父
 在官するをめく。舊例を接て。苛政を練め。あぐく省免とせしむ。練
 者の為小彈。れて。御所のあ怒り。酷く。珠せしむ。とせしむ。父の
 ちのせくうち。熟きて。一通の書と送し。つ。母のあぐく。自殺せしむ。時。寛
 正六年秋九月十一日。吾侪。僅小七歳。在園家財。没官せしむ。後類
 奴婢。東西。離散して。身。隨ふ。の。も。り。豪家。といわれ。る
 大川の水。涸果て。妻子。を追放せしむ。母。は。吾侪。が。扱て。是。首の
 由縁。彼首の相繼。と。彼此。小身を置きて。い。と。悲し。其。の。奴。と。客宿。を
 送る。と。霰降る。冬。も。る。る。ふ。り。粵。小安房の。團司。里見の家。臣

蛭崎十郎輝武。とい。の。原。へ。彼。処。の。豪。民。あり。母。の。後。才。で。あり。え
 彼。蛭。崎。を。公。あ。て。小。母。へ。吾。侪。と。扶。掖。す。吾。侪。へ。母。を。慰。め。つ。辛。く。て。鎌
 倉。小。越。え。安。房。へ。便。船。と。求。小。け。れ。ども。今。戦。國。の。最。中。あ。れ。ば。海。陸。の
 通。路。と。せ。く。彼。処。より。船。を。出。さ。さ。下。総。さ。る。行。徳。の。港。口。へ。上。総。渡。を
 船。あり。と。人。が。繪。て。之。へ。又。行。徳。を。さ。ら。さ。す。稍。の。御。ち。で。来。る。程。小。路。費。を
 賊。小。掠。と。な。れて。宿。借。る。べ。し。由。あ。ら。れ。へ。已。と。得。ぬ。村。長。の。宿。所。小。越。え
 云。云。の。事。を。告。て。その。夜。の。宿。を。と。と。い。ども。あ。ら。れ。長。夫。婦。と。の
 残。り。と。竹。子。と。摺。待。客。舎。の。ひ。付。ど。小。廝。ホ。さ。え。叱。懲。して。引。引。つ。も
 あ。ら。れ。切。く。一。夜。を。柴。小。屋。の。裡。に。あ。り。とも。明。さ。せ。り。と。あ。れ。口。説。く
 小。母。許。され。ど。小。廝。して。追。出。さ。せ。門。を。入。杜。て。見。え。さ。す。日。を。暮。て。雪。の
 ふ。り。来。ぬ。進。退。其。処。小。究。り。親。へ。音。あ。る。夜。の。鶴。子。へ。又。擔。の。寒。在



莊之助

七歳乃小
 児客路
 母を要ふ

天介の妻



時不迷入行路の艱難強顔三人の門まで。の呼吸をとりやとあざつる
 るくも立在バ雪のまじくどやまき。雪吹小五體を吹さられ風不とそ
 破笠の骨まで氷る冬の夜不母へ固より持病不積あり。秋より後の患苦
 心勞客宿と共おつりく。病著ふとり逼られいとも危く見え。六
 勤り騒げど七才児が何せんまもま雪の先ぞ親へ果敢る滅て
 上のふる人へ員入りの十一月廿九日のふるり。空へ骸ふとり著て號
 哭つ天を明せぬ長へその為体をとめくまりてうち吟え吾儕と裡面
 嘔び入きて本貫を問はし。匿む告ふらちも騒ぐどまが母の
 亡骸と棄るが如く埋させその日吾儕と召出。汝へ母と旅不喪ひくる
 べた家もある。又ゆくべり里もある。安房の里見へ成氏方めて。當所へ
 管領家の米地より。かれへ安房へ渡りが。汝が母路費と喪ひつが

門あり死されハ葬の中何れとま。諸難費夥の没残あり。汝今よりコレは
 仕へて勉くこれを報む。久後とてもよらみあじ。され年る母幼稚一三四年ハ
 食損之物の用あり立かこるん。今れハ年限も定め。夏ハ貫布の帷子一ツ
 冬ハ小妻の布子一ツとま。それを過分の給料心とまひとら。一生涯奉公
 せよ。給銀とせぬそのかえぬ。養殺しめし得せんと。いん匿時へ恨く
 朽さしたる限りなられど。撃ぬ舟の楫を終よ。えきたるいとものりれど。
 これより長が小廝かせられ。五年あよりを送りぬれ。あれども志農業貨
 殖を願ふとま。今戦國の時おはれて。身を立家と興さど。いよ小男子つる
 甲斐もる。ともわけて武士ふるん。と思ひ決へ十才の春る。素より長へ
 狐疑ふ。物妬とま。入るま。が本心を顯さど。善悪は就て生命。又違へ
 こそ。愚直を示せば。いと苛く使う。奉公の片は業夜ハ深る。よての習。

益ひらへ林ちきを外序ちるまの人目とまのびくつ。石いしを奉おん木と打てひとり撃う劔けん巻まき法ほうを
試こころ。教おしるうまそ。とかうかうや。大おほ刀はとちを曉さと得とり固かたまりあが志こころを傷や
輩かひ尚まあそせむべ人ひととる朝あさとて愚あやう蠢むとら。彼われ亦またへまそ斗と背せうの小せう輩たう一いつ鄉
與とも小ち媒まのふ足あしとぞ。豫よそぞう君きみが俊す才ざいその孝きやう行ゆく支き使しゆまら。足あしもせりすふ
慕あこしく。こむすの人と交ひふ。億ひと萬人あまは値ち偶あひせんより。憑よかんと思おもへどの長ながとふ
羨あざむ絶たの親おや族むらじるる。その人の子こでそとそれハ間まちり住すまへど物ものゆつらど。おちも
あぶりそで日ひが志こころとあそせん。と思おもひハこのふけへのくるまど。今いまも大人おとなの自みづか
殺ころめより。忽とち地ち小こ路みちひけ。騰あま和わ君きみの聞きこ人ひとよと。吾われ侘わふらへおけとら。主ぬし命いのちハ
日ひ々々為なふ千金あたまふちと賜たまめ之これ天あまの祐たすけと竊ひそか飲みびむそ。来きてこれハ和わ君きみハ
ふく疑うたがひて日ひ々々終ひれともち解とれぬむ。吾われ侘わも又またその意いを猜あやして鹿か忽とちふ
宿しゆく志しを告つあうまど。且またく時とき節せふを候まちふとふ良よ縁ゆかり竟さふ空くううと。て送おくふ異よるる

肢あし體たいの悲あは又また一いつ雙ふたの白玉しらたまさ媒ま妙たとるり。肝かん膽たんと吐へえを得え。方あた是こゝ病やま雀すずめ
花はなを啖くして。飛と騰たうの翅はねと搏とらと。輟とら魚いさな雨あめと受うて。啜く喁うの吻くちくちと泪なみだとふ似にたり。
一いつ生せいの飲の會かい。何なにもこれふ過と人ひと望のぞ望のぞりてゆと。辨わ洋やう物ものくちて。志こころと示しま
る。信しん乃のみハその薄うす命いのちをつが才さいのふ思おもひくんと。竹たけの中なか毎ごと日ごと嘆なげ賞せう。敬おほ馬まこ
あけふ和わ殿どのの大だい志し。こがよ。及およふ所ところふあも。現げんら玉たまが媒ま妙たと。忽とち地ち水みづ魚うの
思おもひとるのゆ。因ゆゑ縁縁るるハあぶくも。譬たとへ今いま示しこれ。関せ帝てい籤せんの詞ことばの結むす句くふ
玉たま鬼おに交まじ時とき當あた得え意い恰た如ごと枯か木き再また逢あ春はると。今いま日ひのゆるま。夫つま月つきを玉たまよ
譬たと玉たまと又また月つき小こ喻あやふ。和わ燮せつよその燈あかり多おほかり。これハ玉たま鬼おにの交まじり。當あたふ意い城しろ
得えづ。と。とら。玉たまが媒ま妙たと。こら。交まじりを結むすぶとゆ。枯か木き再またび春はるふ
あふ。今いまの兩人ふたりを薄うす命いのち。譬たと樹きの榦き大だいと枯かと。片ひと枝えだ僅わずかか残のこるが如ごとく
あるれども不ふ憶おぼ列れつ頸けいの友ともを得えて。送おくふ補お助たすれ名なを揚あ家けと與あふま。至いたす。ハ

枯木の春よあふあふとぞや。後栗共よあふとぞ。神八人の求るが為小鑿
 納を垂ぬる関帝の神慮いとかに又その二句のころへも大人自報して
 和殿母子南北よ奔走し。命運且く吉くざるを示しぬり。されへ経営
 百事費精神南北奔馳運未新としり。豈亦奇るうとぞや。と號
 示せば額義短の意を感悟して信乃が才学の大ききるざるを稱賛す
 且益々額を掩吾侪の僅ふの習して俗字と稽得たるの之を学ぶの
 餘力あり。和君の解せらるるあはれかきと神慮の灼然たるをいふ
 志るやあはれ願ふに今より和君と師と。竊み学問を將大人の教め
 うといひ信乃の答く頭を掉吾侪の僅ふ十一歳襁褓の中より学ばざりし
 とも。何更とるあはれ願ふに幸ふ父の送書あり。和殿の学んたるうら
 貸まべし。願ふ人の善悪と友とを善小善友あり。悪小悪友あり。揮て志

同きと死ハ四海も兄弟あり。吾侪の孤とあり。和殿も又同胞は。今より
 茂を結く兄弟とあり。父願ふの。和殿のころいふぞや。向きて額義
 大死小死びそ固より願ふ所あり。や樂を共みせむとも。憂を與ふせむ
 とも。艱難死をいと相救人の聊もこの盟小背ふ天雷立地ふこれを
 撃入ら小恭しく上天小告。急々如律令。と天小向ひて誓ひし信乃も又大死小
 死びゆる共誓ひし。水と酒の擬へ汲らんとその約を固し。さてその
 年の多おを問ふ額義ハ長祿三年。十二月朔日小せれて十二才
 信乃ハ七月芳りし。則額義を兄と。信乃ハ再拜を。みづる身と稱す。
 共小死びを竭し。さらば額義ハ上坐ふと。信乃又頻小すむれハ額義
 頭をうち掉く。年の多おハとあれか。まれその才とせり。父ハ兄
 るれ莫逆をいと兄才と。長少の座ハ定むべし。嚮小告たる。こが乳

名ハ莊之助入し。まご實名をつられむ。おのふおんが孝とて二郷おゆえ
あり。且その実名ハ戌考るるまごや。こま由て彼白玉は孝の字あるも。寔は
身入又つが玉の義の字あり。父ハ大川清二則任といひ。よるまてつが乳名莊
之助の之の字を首き大川莊助義任と名告るべし。あつまごどもこまのほと
人お告へると。あふむ尺ことおんがとのま欲する所。あふ仗て名を汚さ
と。あふのふと。同ま信乃はうち魚改名ハ主人お後ふのま義任むるは。人
めむるまは。額義と。あふむと。いハ。荒介と。うち笑て。その勿論の
るんり。おんがと。れと。月をかきね。起が。あふせ。陽ま親く。まごま
長夫婦お對ひて。これるく。おんがと。織らん。おんがハ。吾侪を。嘲り。あか。の
如く。まると。れハ。嫌疑と。その間。置む。送。後。か。かり。る。人。これ。既。ま。せ。の。信
と。あり。その。あ。ハ。箇。様。と。棟。助。が。龜。條。又。賺。され。て。か。け。り。と。れ。暮。あ。ら。ひ。つ。

る。その。為。体。を。詳。お。告。その。と。れ。吾。侪。ハ。基。子。の。間。ハ。陽。睦。く。締。ま。ま。ま。つ
寔。お。お。ん。が。の。先。考。へ。人。を。ま。の。先。見。卓。一。行。狀。困。士。三。雙。と。い。ひ。し。ま。む
へ。く。と。い。ひ。あ。入。む。頻。お。嗟。嘆。ま。ひ。し。え。信。乃。ハ。共。お。嘆。息。一。吾。侪。ハ。父。の
送。命。お。ま。ま。が。ひ。宝。刀。を。獲。く。腹。ろ。ろ。れ。伯。母。の。家。又。同。居。サ。バ。お。ん。が
資。お。ま。ま。と。く。宝。刀。を。棄。ま。さ。る。と。難。一。示。さ。る。締。の。執。その。あ。ら。う。を
ゆる。く。い。と。恭。く。諾。ひ。し。ら。額。義。且。く。沈。吟。し。ま。つ。ら。日。と。又。お。ん。が。と。も。お
久。く。あ。ら。ま。在。ん。る。後。ま。の。あ。ら。ま。羽。之。病。お。假。托。く。一。ト。お。ん。が。母。屋。へ。飯。り。ま。ん
お。ん。が。ハ。中。陰。果。る。あ。ら。ま。と。凡。三。五。日。あ。ら。ま。と。や。伯。母。お。ん。が。を。と。ま。せ
多。人。既。お。義。を。結。び。て。お。ん。が。が。父。ハ。こ。が。父。え。け。ん。より。心。喪。お。服。く。報。恩
謝。德。の。信。と。竭。さん。何。で。ふ。女。ま。く。花。を。お。向。経。を。誦。の。ま。孝。と。せ。ん。や。と。將。大。く。
共。お。番。代。が。靈。牌。を。持。し。この。日。の。あ。告。る。折。り。是。然。と。足。音。し。て。外。面。より

八木傳三轉考

本のありき。この人へ誰ぞ看官三輯嗣次の日を等更次巻の端解るん
 他者云予この巻を草まるとん或人側より聞くと難じて云信乃壯助ホ
 英智宏才ありといふとも原良黄口の孺子その年いまだ十五不足
 らむ。あつたふ智辨甚卓一。絶く童子の氣象あり。寓言といふとも
 甚過より。蓋小説へよ人情を鑿をり。又人倦む今この二子
 の傳の如く人情は恃るふありとやといひ。予答ていふとと蒲衣の
 ハオみと。舜の師より。畢子の五歳ふりと。禹を佐く伯益五方あり。
 火を掌り。項橐五歳あり。孔子の師より。いふへの聖賢生るるは
 明智俊才億万人に傑出を固よ。夙惠の列るありと。この他の神童又
 多くと謝在杭管集録あり。一編の文采をるせり。今も拳尚小皇
 ありと。五難組中ふかいと。八犬士の如く亦いふ。亞の軟便且之

予が戲よその列傳を能る所以

又八犬傳十郎輝武が溺死の長祿二年の事又大川莊助が父勝

二が自殺せしむる事よりの八年を歴く寛正六年の事よりの事

海陸の路終る。海二が妻の輝武が死を告ぐと安房へ赴んとて逆

旅より舟中より。婦幼の疑惑を解ん為筆の序小自評をといふ

家傳神女湯 一包代百銅

婦人諸病の良劑あり。一産前産後
 功のこの書の前集より載せられたる事

精製奇應丸

婦人諸病の良劑あり。一産前産後
 功のこの書の前集より載せられたる事

婦人つたむの妙藥

婦人諸病の良劑あり。一産前産後
 功のこの書の前集より載せられたる事

製藥并弘所 江戸元飯田中段下南側四方み之店向 瀧澤氏製

取次所 江戸元神前町の市之南 大坂心齋橋筋唐物町わらちや大助

里見八犬傳第二輯卷之五 終

編述

著作堂馬琴稿本



總卷浄書

千形仲道騰寫

出像

柳川重信繪畫



繡像棗人

朝倉伊八郎刊

○曲亭新著出像國字小説畧目 山青堂開版

美濃舊衣八丈綺談

北高重宣画 全本五册
お勘才三郎が奇談然れり後因果
二字を有く局を結べり実未嘗者の梅説之

南總里見八犬士傳

柳川重信画初輯全五册
甲戌の冬用版賣出り於てハ

朝夷巡寫記初編

歌川豊廣画 全五册
乙亥の春用版賣出り於てハ

里見八犬傳第二輯

柳川重信画全五册發行

朝夷巡嶋記第二編

歌川豊廣画 全五册
近日嗣次用版追々賣出り於てハ

里見八犬傳第三輯

柳川重信画 全五册
東丑の冬月を遲滞賣出り於てハ

文化十三年歲次丙子

大坂齋橋筋唐物町

河内屋太助

江戸馬食町三町目

若林清兵衛

江戸本所松坂町町目

平林庄五郎

筋違御門外神田平齋

山崎平八

刊行書肆

冬十二月

吉日發販

